

ドローンで農地管理

会沢高圧コンクリート

コンクリート製品を手掛ける会沢高圧コンクリート(北海道苫小牧市)は小型無人飛行機ドローンを使った事業に乗り出す。米マサチューセッツ工科大学(MIT)発のスタートアップが開発したドローンを導入し、大規模な農地を管理できるサービスを2020年から始める。将来は道路や橋、送電線網といったインフラ維持にも領域を広げ、収益源を広げる。



TFTが開発したハイブリッド型ドローンは長い航続時間が売りだ

インフラ維持 進出見据え

同社は最新技術を取り入れるため、18年からMITの産学連携プログラムに参加し、この分野で注目を集めるトップ・フライト・テクノロジー・ソリューションズ(TFT)と提携した。まずはTFTの長時間飛行できるドローンを7月に仕入れ、東神楽町の生産者のもとで作物の生育状況の確認や農薬散布に使えるか実証実験で確かめる。早ければ20年から大規模な農地を抱える生産者にサービスを提供する。

一般的なドローンはバッテリー駆動で飛行時間が15分程度と短い。TFT製はエンジンを搭載し、ガソリンを燃やして

発電した電気をバッテリーで蓄電しながらモーターを動かす。エンジンの振動で安定した飛行を妨げないよう、機体の揺れを抑える工夫を施し、10キログラムの荷物を積んだまま1時間にわたって飛行を続けられる点が強みという。

新事業の対象に農業を選んだ。既存の販路を活用して農業分野でドローン技術を蓄積し、最終的にはインフラ維持分野に進出することを狙う。

現状のドローンでは道路や橋の現状を確認できても、修理や補修は作業員が現場に行く必要がある。重たい荷物を積めるTFT製であれば、作業ロボットを搭載してコンクリートを吹き付けるような作業ができる。作業員が現場に赴く必要がなくなり、人手不足やコストの削減にもつながる見込みだ。(山中博文)

石屋製菓がファンド

原料製造や農家などに出資

洋菓子「白い恋人」で知られる石屋製菓(札幌市)は、技術があるものの後継者難や経営課題などを抱える企業を支援するためファンドを立ち上げる。北海道内の企業を中心に、菓子の原料製造や農業など同社の事業と関連のある事業者に対して出資する。5月31日から募集を開始し、総額10億円を投資する。新ファンド「ISHI YAKURI EITIBUSS」では菓子「白い恋人」でYAKURI EITIBUSSは菓子の原料や包装、物流など自社の事業や北海道に關係する幅広い事業者を対象とする。運用期間は最大12年。2018年12月に「北海道1500年キャピタル」を設立し、ファンドの準備を進めてきた。投資資金は自ら用意し、運営は金融機関などと連携する。金融機関以外で民間企業がファンドを立ち上げるのは道内では珍しいという。技術やノウハウはあるが人材不足の企業に社員を派遣するほか、将来は後継者がいない企業の事業承継も検討する。訪日客需要で自社の販売は伸びているが、「海外の好みに頼らず、国内の基礎を固めておくことが重要」(経営管理部)と考える。国内での事業強化や道内事業者の経営基盤の底上げを図る。

これが空飛ぶ貴賓室!! 先代の政府専用機



操縦席は2階の最前部にあり、操縦士2人に加えて飛行ルートをつかさどる航法士用のスペースもある。要人の分刻みのスケジュールを守るため、ここで飛行計画を調整してきた。電波を飛ばして敵機内に組み込まれているという。

3月に退役した先代の政府専用機(ボーイング747-400型)の貴賓室が24日、航空自衛隊の千歳基地(北海道千歳市)で報道陣に初めて公開された。写真。海外訪問する際に首相や皇族が滞在するスペースで、これまで警備の都合を理由に内部の詳しい構造は明らかになっていなかった。貴賓室は1階の最前部にあり、広さは33平方メートル。正面に大型モニターが設置され、壁には世界地図がかけられていた。執務用の机には飛行中も通話できる衛星電話が据え置かれ、打ち合わせ用のテーブルや革張りソファ、ベッドが並ぶ。シャワールームと洗面台もあり、ホテルの1室を切り取ったような構造だ。貴賓室の後部は夫人室、秘書官席(1席)、ファックスなどの機器を並べた事務室が続く。随行員室(21席)はビジネスクラスに相当する座席で、おもに随行する外務省職員らが使う。最も後方にあったのが一般客室(89席)。海外訪問に同行する記者らが使用する。記者会見席が設置され、座席は「プレミアムエコノミー」クラスに見える。